



一般社団法人 投資信託協会
広報部 調査広報室 調査広報室レポート

投資者意識調査に見られる満足度と不安感（1）

－現在の投資者の6割は投資に不安感を抱いている
（1万人アンケート調査より）－

1. 問題意識
2. アンケートの内容
 - (1) 実施概要
 - (2) 「満足度」と「不安感」についての設問
3. 4象限に見る投資者の特徴
 - (1) 主な設問の偏差値
 - (2) 各象限の自認投資結果と株式・投資信託への期待額
 - (3) 自認する金融知識度
4. 結び

2025年6月2日

一般社団法人投資信託協会 広報部調査広報室長 青山直子
（協力者：広報部調査広報室 主任 篠原仁）

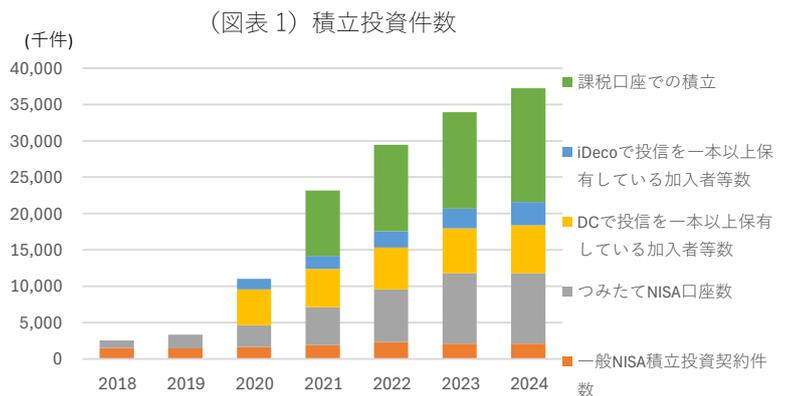
1. 問題意識

2014年に一般NISA、2018年につみたてNISA、さらに新たな制度として2024年1月に新NISAがスタートし、着実にその口座数が伸びている。それら以前に2001年から確定拠出年金が開始され、非課税での積立投資の認知は進んでおり、それらの制度によって投資を始める人々が増えていると思われる。また、非課税投資制度利用件数に比例するように課税口座での積立投資件数も増えており、延べ件数は4,000万件¹に接近している（図表1²）。

それらを含めて、株式・投資信託を保有している人の割合は、本会が実施した1万人アンケート調査では、2022年度では38.0%、2023年度では37.8%であったところ、2024年度では40.8%と伸びていた。

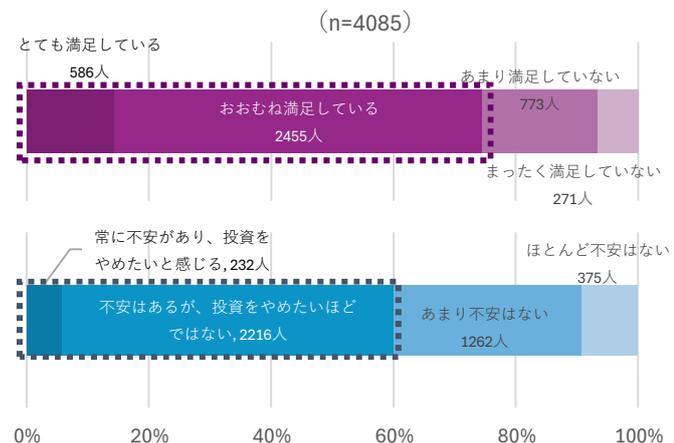
2022年11月に掲げられた政府による「資産所得倍増プラン」を背景に、更なる安定的な資産形成への実現に向けて、人々の投資意欲は高まっているように見受けられるが、では、現在投資を行っている人々ほどのような意識をもって投資に向き合っているのだろうか。

それを探るために、本会は2024年度調査（2025年1月～2月に実施）において、株式や投資信託の投資者の「満足度」と「不安感」に係る設問を設定した。それによれば、「投資結果に満足している」という人は投資者全体の約7割であったものの、一方で、不安感を抱えている人は全体の約6割であった（図表2）。



(出所) DC、iDeCoで投信を一本以上保有している加入者数は運営管理機関連絡協議会「確定拠出年金統計資料」より（2020から）。一般NISA積立投資契約件数、つみたてNISA口座数、課税口座での積立は金融庁より（2021年から）。数値は各年末において取得し得る最新の数値を用いている。

(図表2) 投資成果への満足度と投資への不安感

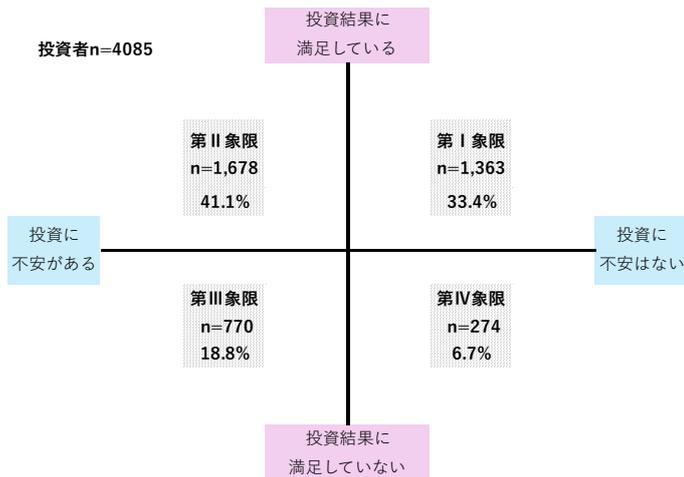


¹ 2021年5月に本会「すべての人に世界の成長を届ける研究会（通称:つみけん）」が公表した報告書「2041年、資産形成をすべての人に～5つのターゲットと15のアイデア～」では、2041年における目標の1つとして「つみたてNISA及びDC等による積立投資総件数を4,000万件」（現役世代の約半数が非課税積立制度等を利用し、そのうちの半数の人が複数の制度を利用している状況を想定）を掲げている。

² NISAについては、現時点で成長投資枠、つみたて投資枠の内訳が不明であり、グラフにおける最新の数値は2023年末の旧NISAのものである。NISA口座数全体は2025年3月で26,469,325件と増加しており、積立投資件数も図表1より多いと思われる。

そこで、満足度と不安度を2軸にして4つの象限に分けると、「投資結果に満足し、投資に不安感はない」という第Ⅰ象限に該当する人は、投資者全体の約3分の1であるのに対し、「投資結果に満足しているが、投資に不安感がある」という第Ⅱ象限に該当する人が4割を超えており、4象限の中で最も多かった（図表3）。

（図表3）満足と不安の4象限



投資結果に満足しているが、投資に不安感を抱いているというのが、投資をしている人の平均的な姿と言えよう。調査時期は、まだトランプ関税などの問題で金融市場が不安定化する前でありながら、不安感を抱えながら投資を行っている人が多いことには意外感がある。新NISAを機に、投資者が増えていると思われるものの、大半が不安感を抱えていては、平穩に投資を続けることが難しいかもしれず、長期投資に至らない可能性があると言えよう。

満足度は短期的な運用結果に連動している面があると考えられ、内外の株式市場が下落するなどして投資パフォーマンスが低下した場合には、「満足しながらも不安がある」4割の人々の中から、今回の調査では2割弱である「不満かつ不安」という第Ⅲ象限に転じてしまう人が多くなることも予想される。

そこで、本稿では、4つの象限毎の投資者の特徴をアンケート調査の結果から捉えたい。

2. アンケートの内容

（1）実施概要

アンケートはインターネットにより、以下のとおり実施した。

●調査時期

2025年1月28日（火）～2月4日（火）

●調査目的

全国の20歳～69歳の男女個人を対象に、投資（株式や投資信託）の利用実態別に調査を行い、一般生活者の①投資行動、②投資に関する意識、③今後の投資意向についてそれぞれ確認することで、資産形成に対するニーズを

把握し、今後の投資・積立投資の普及、利用促進につながる基礎資料とする。

- 調査手法 インターネット調査（インターネットモニターパネル利用）
- 調査地域・対象 全国 20～69 歳男女個人
- サンプル数・割付

合計 10,000 名を性・年代・エリア（首都圏、阪神圏、その他地域の 3 ブロック）の人口構成比（令和 6 年 1 月 1 日現在の住民基本台帳に基づく）で割付

		20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	20-69歳計
男性	首都圏	269	290	359	391	267	1,576
	阪神圏	120	123	157	179	131	710
	その他地域	432	480	629	654	583	2,778
男性計		821	893	1,145	1,224	981	5,064
女性	首都圏	263	275	337	365	260	1,500
	阪神圏	120	124	161	183	139	727
	その他地域	399	454	602	646	608	2,709
女性計		782	853	1,100	1,194	1,007	4,936
TOTAL		1,603	1,746	2,245	2,418	1,988	10,000

株式・投資信託	現在投資実施者	4,085
	過去投資実施者	608
投資経験別	投資未実施者	5,307

世帯年収	n	%
全体	10,000	100.0
100万円未満	516	5.2
100～200万円未満	605	6.1
200～300万円未満	826	8.3
300～400万円未満	986	9.9
400～500万円未満	1,004	10.0
500～600万円未満	869	8.7
600～700万円未満	741	7.4
700～800万円未満	682	6.8
800～1,000万円未満	919	9.2
1,000～1,500万円未満	829	8.3
1,500～2,000万円未満	174	1.7
2,000～3,000万円未満	65	0.7
3,000万円以上	46	0.5
わからない・答えたくない	1,738	17.4
平均値（万円）	-	615.2

（２）「満足度」及び「不安感」についての設問

「満足度」及び「不安感」については以下の設問による。同設問は、現在投資を行っている人と過去に投資をしていた人を対象にしているが、本稿では、現在投資をしている人に限定して述べる。

【投資結果への満足度合い】

Q. あなたは自分の投資の結果・成果に満足していますか（していましたか）。最もあてはまるものをお選びください。（１つだけ）

1. とても満足している／していた 2. おおむね満足している／していた 3. あまり満足していない／していなかった 4. まったく満足していない／していなかった

【投資の際の不安感度合い】

Q. あなたは自分が投資をする際、どの程度不安がありますか（ありましたか）。最もあてはまるものをお選びください。（１つだけ）

1. 常に不安感があり、投資をやめたいと感じる（やめた） 2. 不安感はあるが、投資をやめたいほどではない（なかった） 3. あまり不安感はない 4. ほとんど不安感はない

満足度は、上記選択肢の 1.と 2.の選択者を「満足している」グループ（図表 3 の第 I 象限及び第 II 象限）と捉え、不安感については、選択肢の 1.と 2.を「不安がある」グループ（第 II 象限及び第 III 象限）と捉える。従って、常時不安感がある者と、やめたいほどではないが不安感がある者を「不安がある」と捉えている。

3. 4 象限に見る投資者の特徴

(1) 主な設問の偏差値

上記の設問から、図表 3 の 4 象限に分類し、主な設問から以下の偏差値を計算したものが図表 4 である。

$$Z = \frac{X - \mu}{\sigma} \times 10 + 50 \quad X = \text{各象限平均値} \quad \mu = \text{母集団の平均値} \quad \sigma = \text{母集団の標準偏差}$$

偏差値 48 未満と 52 超に網掛けをしており、52 超は太枠で印している。

偏差値で際立つ値があるのは、第 III 象限の「不満であり不安」のグループである。このグループは、投資信託をあまり保有せず、あまり積立投資を行っていない傾向がある。積立の非課税制度の利用度も他のグループに比べると低い。さらに、積立投資の具体的なシミュレーションを見ても、積立投資を行ってみようという意欲も相対的に低い。

このグループの投資の成果は低く、平均するとマイナスである（図表 5）。また、自認する金融知識の自信度が最も低く、属性としては、他のグループよりも高齢層で、やや女性が多く、年収や金融資産額は他のグループより低い。

（図表 4）主な設問の各象限の回答偏差値

主な設問	選択肢等	第 I 象限 満足・安心	第 II 象限 満足・不安	第 III 象限 不満・不安	第 IV 象限 不満・安心	n
【投資方法】 Q.あなたは現在、どのような投資（株式・投資信託）を行っていますか。（いくつでも）	1.毎月の積立投資	51.74	50.84	45.92	47.63	4085
	2.自分でタイミングを見て投資（一括投資）	49.00	49.45	52.71	50.71	
【利用している積立口座】 Q.あなたが現在行っている積立投資は、どの口座で行っていますか。あてはまるものをすべてお知らせください。（いくつでも）	1.2023年までの一般NISA	50.19	50.62	48.63	49.11	2513
	2.2023年までのつみたてNISA	51.40	50.39	47.31	48.17	
	3.NISAつみたて投資枠	51.55	50.66	46.55	47.96	
	4.NISA成長投資枠	51.20	50.45	47.44	48.50	
	5.定拠出年金（企業型DC）	50.52	50.34	48.70	48.99	
	6.個人型確定拠出年金（iDeCo）	50.73	50.43	48.27	48.63	
	7.財形（投資をしている場合のみ）	50.09	50.05	49.93	49.45	
	8.非課税以外の積立投資口座数	50.52	49.60	49.74	50.59	
【毎月の貯蓄額】 Q.毎月いくらかの貯蓄（預貯金）をしていますか。	記入（半角整数）	50.54	50.36	48.54	49.21	4085
【毎月の積立額】 Q.毎月いくらかの積立投資をしていますか。（半角整数）	記入（半角整数）	51.56	50.21	47.24	48.70	2513
【金融機関への信頼】 Q.あなたは投資で利用している金融機関を信頼していますか。（1つだけ）※預貯金のみは含みません。	1.金融機関も担当者も信頼している	48.69	48.61	53.20	56.05	4085
	2.金融機関は信頼しているが、担当者は信頼できない					
	3.担当者は信頼しているが、金融機関は信頼できない					
【投資時の閱讀資料】 Q.あなたが投資信託を購入する際、投資判断の材料として読んだ資料を以下のうちから選びください。（いくつでも）	1.目論見書	50.74	50.63	48.03	47.99	4085
	2.販売用資料	49.76	50.79	49.25	48.47	
	3.重要情報シート	49.94	50.69	49.00	48.87	
	4.ネットや動画の情報	50.93	50.24	48.57	47.92	
	5.投資判断の材料として読んだものは特になし	50.70	49.48	49.58	50.88	
	6.わからない・覚えていない	49.65	49.70	50.52	52.12	

【主観投資成果増減率】（現在投資実施者（株式または投資信託）で資産額が増加・減少した人） Q.株式または投資信託による投資で、1年前と比較して、何%程度変動がありましたか。	記入 [xxx]%程度増加した [xxx]%程度減少した	51.17	50.23	47.48	49.03	3587
【保有投資信託の評価額】 Q.保有する株式の評価額を、おおよその金額で構いませんのでお知らせください。（それぞれ1つだけ）	選択肢同上	50.58	50.56	47.44	48.97	2985
【株式損失許容額】 Q.株式に100万円を投資して損失が出た場合に、どのくらいの金額までなら保有を継続しようと思いますか。（1つだけ）	1.99万円（1万円損失）2.90万円（10万円損失）3.80万円（20万円損失）4.70万円（30万円損失）5.60万円以下（40万円以上損失）	51.89	48.99	48.96	49.70	4085
【投資信託損失許容額】 Q.投資信託に100万円を投資して損失が出た場合に、どのくらいの金額までなら保有を継続しようと思いますか。（1つだけ）	選択肢同上	52.07	49.16	48.14	50.08	4085
【20代・30代積立シミュレーション提示後意向】 Q.毎月の積立型の投資信託に、以下のように40年投資した結果の予想として、このような予想評価額が予測されている場合、あなたはどのように思いますか。（1つだけ） *シミュレーション図は文末【アンケート図1】	1.モデルケースの金額を積み立てたい 2.積み立てたいが、モデルケースの金額ほど積み立てられない 3.モデルケースの金額より多く積み立てたい 4.積み立てるつもりはない	49.38	48.67	52.69	55.33	1192
	1.選択者	51.16	50.17	48.00	48.80	417
	4.選択者	50.19	49.26	49.95	53.74	179
【40代・50代積立シミュレーション提示後意向】 Q.毎月の積立型の投資信託に、以下のように20年投資した結果の予想として、このような予想評価額が予測されている場合、あなたはどのように思いますか。（1つだけ） *シミュレーション図は文末【アンケート図2】	選択肢同上	49.87	48.87	51.13	54.17	1930
	1.選択者	50.29	50.29	49.64	47.80	582
	4.選択者	49.76	49.28	51.22	52.19	509
【インフレ率の認識】 Q.物価の上昇率（インフレ率）が3%であると見込まれる時に、あなたが保有する資産が1年で2%増える場合、1年後の状況はどのようになりますか。（1つだけ）理解	1.資産は実質的に価値が下がるので、商品を買う量が減る 2.資産が2%増えるので、商品を買う量が増える 3.変わらない	49.61	49.62	50.52	52.79	4085
	1.選択者	50.49	50.12	49.84	47.30	2350
【分散効果の認識】 Q.次のA社株とB社株を均等に購入する場合、リターンとリスクはどのようになると考えられますか。 A社株：リスク・リターンともに高い B社株：リスク・リターンともに低い なお、リターンとは収益、リスクとは収益の振れ幅を指します。（1つだけ）	1.均等に買うのだから、リスク・リターンとも、A社株とB社株の平均になる 2.2種類の株式を買うことで、振れ幅が抑えられ、リターンは平均に、リスクは下がる 3.2種類ともリスクのある株式を買うのだから、リターンは平均に、リスクは上がる 4.2種類の株式を買うので、リスク、リターンとも合計され、大きく、ハイリスクハイリターンになる	49.48	49.61	51.01	52.13	4085
	2.選択者	50.55	50.17	49.11	48.74	1745
【値動きの認識】 Q.一般的に、投資した際の値動きは以下のどれに当てはまると思いますか。（1つだけ）	1.100万円を投資したら、1年後に90万円になるかもしれないが、110万円になるかもしれない 2.100万円を投資したら、1年後に100万円を下回ることはなく、110万円より多く増えるかもしれない 3.100万円を投資したら、1年後に100万円を下回ることはないが、110万円より多く増えるものでもない 4.100万円を投資したら、1年後には100万円を下回り、100万円より多く増えることはない	49.10	49.56	50.94	54.52	4085
	1.選択者	50.79	50.17	49.36	46.86	2920
	4.選択者	49.49	49.33	50.72	54.63	98
【金融知識自信度】 Q.あなたは、金融に関する知識にどの程度自信がありますか。以下の7段階のうち、最も近いものをお答えください。（1つだけ）	1. 1 全く自信がない 2. 2 ← 3. 3 ← 4. 4 どちらともいえない 5. 5 → 6. 6 → 7. 7 かなり自信がある	52.05	49.55	46.58	52.14	4085
【性別】 Q.あなたの性別をお知らせください。（1つだけ）	1.男性 2.女性	49.67	50.77	49.77	47.58	4085
【年齢】 Q.あなたの年齢をお知らせください。	記入	48.69	50.24	52.28	48.64	4085
【世帯年収】 Q.あなたの世帯年収をお知らせください。（それぞれ1つだけ）	1.100万円未満 2.100~200万円未満 3.200~300万円未満 4.300~400万円未満 5.400~500万円未満 6.500~600万円未満 7.600~700万円未満 8.700~800万円未満 9.800~1,000万円未満 10.1,000~1,500万円未満 11.1,500~2,000万円未満 12.2,000~3,000万円未満 13.3,000万円以上 14.わからない・答えたくない ⇒14.排除	51.30	49.96	47.99	48.98	3690
【金融資産評価額】 Q.あなたの世帯で保有されている金融資産の概算の評価額として当てはまるものをお知らせください。（1つだけ） ※「金融資産」とは、預貯金、社債や国債などの債券・株式、投資信託、生命保険のうち満期金のあるもの、貸出金など。土地や不動産は除きます。	1.10万円未満 2.10~100万円未満 3.100~300万円未満 4.300~500万円未満 5.500~1,000万円未満 6.1,000~2,000万円未満 7.2,000~3,000万円未満 8.3,000~5,000万円未満 9.5,000万円~1億円未満 10.1億円~3億円未満 11.3億円以上 12.わからない・答えたくない ⇒12.排除	50.94	50.39	47.93	48.18	3164

(2) 各象限の自認投資結果と株式・投資信託への期待額

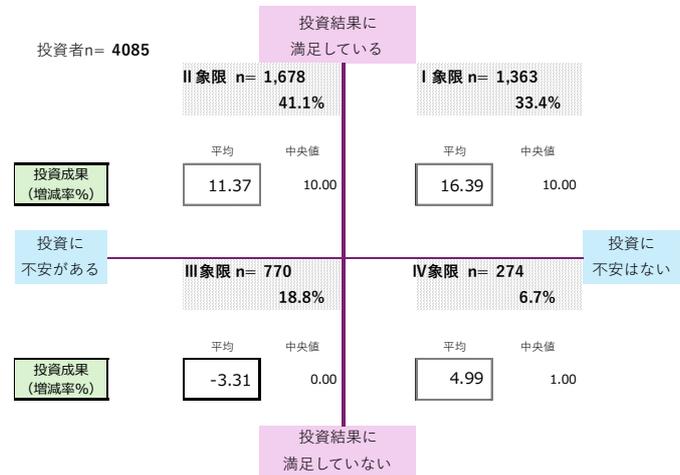
図表5は、各象限の自認する投資成果の平均である³。

投資成果が最も高いのは第I象限のグループであり、自認する投資結果がマイナスであるのは、結果に不満で投資に不安感がある第III象限のグループだけである。自認する投資結果が悪ければ、「不満であり不安」であるのは当然のことかもしれないが、不安感から不満な結果となったのか、不満な結果から不安感を抱いているのかは定かではない。

またこのグループは、図表4の偏差値に表れたように、積立投資よりも一括投資を行う傾向が強い。

毎月の貯蓄額と、積立投資額⁴を見ると、相対的に最も低いのは第III象限のグループであり、毎月の積立投資を行っている人の割合も相対的に少ない（図表6）。不安感を抱いていることから継続的な積立投資に消極的であるのか、一括投資を好む結果、不安感を抱くのか、その因果まではわからないものの、積立投資の実施度合いに関係していることは言えよう。

(図表5) 各象限の自認投資結果



(図表6) 各象限の毎月の貯蓄額と積立投資を行っている人の割合及び積立投資額

	n	毎月の貯蓄額の平均 (円)	左記中央値 (円)	積立投資を行っている人の数	左記割合	毎月の積立投資額平均 (円)	左記中央値 (円)
満足・安心 (第I象限)	1,363	54,714	30,000	954	70.0%	58,505	40,000
満足・不安 (第II象限)	1,678	53,207	30,000	1101	65.6%	50,800	30,000
不満・不安 (第III象限)	770	38,113	30,000	321	41.7%	39,707	20,000
不満・安心 (第IV象限)	274	43,708	20,000	137	50.0%	49,533	30,000

第II象限のグループは、毎月の貯蓄額は第I象限に近いものの、毎月の積立投資額や投資成果は第I象限のグループを下回る。不安感が積立投資をためらわせる要因となっていることがうかがわれよう。

図表7は、株式投資や投資信託投資に期待する額（100万円がいくらであると良いか）で

³ 各右横の数値は中央値

⁴ 積立貯金額、積立投資額又はその合計が世帯年収（回答がない場合は、回答者の年代の世帯年収の中央値）を12で除した額を上回る場合、当該積立額は異常値として、各世帯年収層における積立額中央値（積立額0を除く）に修正

ある。期待リターンに対する期待ボラティリティは尋ねていないため、不備のある問いではあるが、「満足し不安はない」という第Ⅰ象限のグループは、株式や投資信託に対して現実的なリターンを想定していると思われる。

(図表7) 各象限の株式・投資信託への期待

(万円)

	n	株式1年後		投資信託1年後		株式10年後		投資信託10年後	
		平均	中央値	平均	中央値	平均	中央値	平均	中央値
現在投資者全体	4085								
満足・安心 (第Ⅰ象限)	1363	117.6	110	114.9	110	278.8	200	260.3	200
満足・不安 (第Ⅱ象限)	1678	122.0	110	118.3	110	274.4	200	270.9	180
不満・不安 (第Ⅲ象限)	770	127.2	110	130.7	110	367.1	200	336.8	180
不満・安心 (第Ⅳ象限)	274	142.8	110	121.3	110	382.6	200	353.4	170

また、図表4中の損失許容度額に関する設問について、100万円を投資した場合の損失許容額の平均値を推計すると、図表8の通り、第Ⅰ象限のグループは、他のグループに比べて高く、損失が生じても投資を継続する意思の強い傾向がある。

(図表8) 回答平均値からの損失許容額の推計

(円)

	n	株式損失許容額 (-)	投資信託損失許容額 (-)
現在投資者全体	4085	186,047	181,028
満足・安心 (第Ⅰ象限)	1363	221,423	216,288
満足・不安 (第Ⅱ象限)	1678	172,884	170,024
不満・不安 (第Ⅲ象限)	770	172,468	156,623
不満・安心 (第Ⅳ象限)	274	182,117	182,117

こうした点では、第Ⅰ象限のグループは、長期投資を行いやすいと言えよう。ただ、そうしたグループは投資者全体の3分の1に過ぎず、積立・長期投資が資産形成の手段として幅広い層に定着しつつある、とは、まだ言い難いのではないだろうか。

(3) 自認する金融知識度

「不満だが安心」しているという第Ⅳ象限のグループの際立つ特徴は、図表4の金融知識度に対する自信度の設問を見ると、自認する金融知識度は高いが、投資についての設問の正答率が低いことにある。

設問は3つだけであり、結論を急ぐべきではないが、すべての問いに対して正答率が低いことは注目される(図表9)。

(図表 9) 各象限別の投資に係る設問正答率

	n	値動きの認識		インフレ率		分散効果	
現在投資者全体	4085	2920	71.5%	2350	57.5%	1745	42.7%
満足・安心 (第Ⅰ象限)	1363	1023	75.1%	817	59.9%	619	45.4%
満足・不安 (第Ⅱ象限)	1678	1212	72.2%	975	58.1%	731	43.6%
不満・不安 (第Ⅲ象限)	770	528	68.6%	437	56.8%	295	38.3%
不満・安心 (第Ⅳ象限)	274	157	57.3%	121	44.2%	100	36.5%

このグループは投資者の内の6.7%と少ない数ではあるが、金融機関を信頼せず、投資の際にあまり情報を見ず、積立投資には興味を持たず、株式や投資信託は高いリターンが得られるものと思い、金融知識はあると自認しているものの、投資に係る簡単な設問には正答しない、という特徴が見られる。

主観的な金融リテラシーの自信度が高い人は、投資に対する不安感が低い傾向が見受けられるが、第Ⅳ象限のグループに見られるように、株式や投資信託に過度な期待を抱いたり、投資に関して誤った知識を持っているならば、投資においてリスクを取り過ぎてしまったり、投資詐欺などの被害に遭うなどによって大きな損失を被ることになるかもしれない。金融知識について自信の高い人に対しても正しい理解を求めることは肝要であろう。

4. 結び

繰り返しではあるが、本調査は2025年1月に実施した。その時点で、約6割の投資者が不安感を抱いていた。市場の動向によっては、その不安感が大きなものとなり、長期投資から脱落してしまいかねない。そうした行動があれば、その姿は、これから投資を行うとする人たちにとって、意欲を削いでしまうことにもなるだろう。

2015年の米国の消費者金融保護局(CFPB: Consumer Financial Protection Bureau)によれば、“Financial well-being is a state of being wherein a person can fully meet current and ongoing financial obligations, can feel secure in their financial future, and is able to make choices that allow enjoyment of life.”と定義されている。これを、「金融ウェルビーイングは、現在および継続的な経済的義務を十分に果たすことができ、将来の経済的安定について安心感があり、人生を楽しむための選択ができる状態である。」と訳すならば、不安感を抱きながら投資を行っている人々は、金融ウェルビーイングを実現できておらず、幸福感を得られていないことになろう。

不安感なく結果に満足しながら投資を実践する人々が増えてこそ、それに続く人々があるとすれば、投資への不安感解消は重大なことであると考えられる。不安感を抱く人々について、別稿でより考えたい。

【アンケート図1】



【アンケート図2】



【参考文献等】

- ・ Consumer Financial Protection Bureau (2015) “Financial well-being: The goal of financial education”
- ・ Festinger, L. (1957). A theory of cognitive dissonance. Stanford University Press.
- ・ OECD (2024), G20 policy note on financial well-being, OECD Publishing, Paris,
- ・ Locke, E. A., & Latham, G. P. (2002). Building a practically useful theory of goal setting and task motivation: A 35-year odyssey. American Psychologist, 57(9), 705–717.
- ・ 梶田幸作、本間光、大庭昭彦 (2025) 「投資に満足しているのはどんな投資家なのか？」投資信託協会ウェブサイト内つみけんサイト

(問い合わせ先)

一般社団法人 投資信託協会

広報部 調査広報室

03-5614-8455

jita-research@toushin.or.jp